

1 東播磨子ども観光大使「小学生による魅力ある地域資源の学びから」 (東播磨子ども観光大使 小林 日和 さん、小林 心和 さん)

平岡北小学校6年生、小林日和です。「めざせ！東播磨子ども観光大使」に参加しました。なかでも、①加古川食肉センター、②郷土の偉人、ジョセフ・ヒコの話、③加古川に入って魚を獲ったこと、この3つが印象に残っています。なぜ、この3つかというと、食肉センターは私たちが食べる牛を解体するところで、枝肉を捌く、貴重な瞬間



を見せてもらいました。播磨町出身のジョセフ・ヒコは、日本で日本語の新聞を初めてつくった人でした。加古川に入って魚獲りをしたときは、台風の後だったので、水の量が増え、水流も激しかったですが、エビ等の色んな生き物を捕まえて、自然を感じることができました。参加して良かったと思ったことは、普段体験できないことを自分の体で体験したり、実際に行って、話を聞いて、皆と考えたことです。たくさんの方々の力を借りて、たくさん東播磨の良いところを見て、聞いて、体験してきました。本当に参加して良かったです。

平岡北小学校5年生、小林心和です。私は、かつめしづくりとお箸をつくったことが楽しかったです。かつめしは、「かつめし いろは一ず」の店主である一角さんに来ていただいて、一緒にかつめしをつくりました。お箸づくりは、細い木をカンナで少しずつ削って、お箸の形に仕上げました。「めざせ！東播磨子ども観光大使」に参加していないと、できないことを色々しました。皆と協力してつくったから楽しかったですし、協力したから早く綺麗にできることが分かりました。そして、先生や色んな人との関わり合いは、とても大切だということも分かりました。だから、皆との関わり合いが良くなり、誰とでもあいさつや遊び等、一緒にできるような楽しい地域になったら嬉しいです。

東播磨子ども観光大使として、色々勉強や体験をしてみて、東播磨は、山や川等の自然に囲まれて、歴史のある、とても素晴らしい地域だと思いました。これは、ずっと守っていかなければいけないと思いました。そのためには、私たち子どもがず〜っと住みたいと思う何かが必要だと思いました。私たちは、一生懸命考えました。1つ目は、県や市町の情報を常にチェックできるように、一家に一台、iPadを配る。2つ目は、一日中遊べる長い滑り台のある大きな公園やアスレチック、BBQ広場をつくる。3つ目は、高い所から加古川市の自然を

感じることができて、外国人の観光客が増えるように、加古川タワーを建てる。4つ目は、信号無視や交通違反、悪いことをした人を取り締まるために、信号機や公園に監視カメラを付ける。5つ目は、家の近所にも小さい公園はありますが、ボール遊びを禁止している公園が多いです。ボール遊びができる公園がもっとできれば良いと思います。そして、小さい子どもからお年寄りまでが元気であるために、皆でできるスポーツ、体操等があれば良いと思います。そうすれば、おじいさん、おばあさんと、もっともっと話ができると思います。大好きな東播磨だからこそ、もっともっと色々な人に東播磨は良い地域だと言ってもらいたいです。これで、終わります。

2 県立東播工業高等学校機械科「ものづくり企業の工場見学体験を通して」 (県立東播工業高等学校機械科3年生 原 克典 さん、三宅 和哉 さん、橋本 篤旨 さん)



平成28年3月29日(火)に実施された「東播磨ものづくり探訪会」に参加させていただいた、東播工業高等学校機械科3年生の原、三宅、橋本です。私たちは、この見学会から半年後に就職試験を受け、それぞれ地元の企業に就職が内定しています。本日は、就職決定に向けた取組や、地元地域への思い等を発表させていただきます。

させていただきます。よろしくお願ひします。

まず、簡単に本校の紹介をさせていただきます。東播工業高等学校は、昭和39年の創立で、私たちは51回生となります。宝殿駅から北へ約3km、神吉山の南側に広大な校地があります。設置学科は、機械・電気・建築・土木の4科で、1学年6クラス、学校全体で約700名の生徒が学んでいます。進路について、全体的には85%が就職、15%が進学しています。県下の工業高校の中でも、就職率が高い学校です。

では、発表に移ります。はじめに、「東播磨ものづくり探訪会」に参加した理由からです。①基本的には、先生に勧められたからです。高校を卒業したら、就職しようと考えていましたが、まだ具体的な企業を考えていなかったため、情報を得るために参加しました。②この工場見学までに、将来就職したい企業を決めていましたが、ほかにどんな企業があるのか気になり、参加してみようと思いました。③就職希望でしたが、どんな企業があるのか、多くは知りませんでした。課題研究の関係で、先生に進められて参加しました。

次は、私たちが機械科を選んだ理由です。①高校を卒業したら、働いて、親にしっかりと恩返しをしようと思いました。小さいときから、機械等に興味があり、機械科を選びました。②高校を卒業したら、就職しようと思ったからです。高校には、商業科や農業科もありますが、車やロボットをつくらしてみたいと思い、機械科を選びました。③小さい頃から、ものづくりに興味がありました。東播工業高等学校のオープンハイスクールに参加し、旋盤でつくった作品の表面の綺麗さに感動し、自分もこういうことをしたいと思い、機械科を選びました。

機械科で勉強した感想。①機械科での勉強は、覚えることが多く難しかったです。特に、実習で機械を扱うには、安全第一で、服装から正すことを学びました。作業をするときは、安全が大切だと思いました。②機械という専門教科では、全く知らなかったことを覚えるのに時間がかかりました。なかでも、特に製図が印象に残っています。はじめの頃は、製図が得意ではなく、2年生の基礎製図検定に落ちましたが、3年生の機械製図検定には絶対に受かりたいと思い、勉強した結果、無事に受かることができました。③就職に向けて、自分磨きのため、旋盤を頑張りました。技能検定2級に挑戦しようと思い、2月から練習に取り組みました。7月の実技試験、8月の筆記試験を受け、無事合格することができました。自分としては十分な結果が残せたと思います。

地元就職した理由。①地元の高校に入学できたので、地元の企業に就職しようと考えていました。幸い、私の育った地域には、日本を代表するような企業があり、また色々な工場を見学できる機会もあり、希望する職種に就職できました。②私はロボットに興味があり、K社（明石市）に就職します。産業用ロボットは、組立・溶接・塗装といった作業をこなし、生産効率を上げることができます。そういう産業用ロボットづくりに携わりたいと思い、そういうロボットをつくらしているK社（明石市）に就職したいと思い、就職先を選びました。③加古川市は、生活をする上で、特に不自由を感じませんし、近くに大企業や工場団地があります。就職するために、地元を離れなくて良いのが、加古川市の魅力だと思います。

東播磨地域に住み続ける理由について、①私は子供のときから高砂市で育ったので、大人になっても、その地域で働き、生活していこうと思います。この地域は、多くの工場がある反面、自然環境も良く、交通の便も良いので生活しやすいと思います。②加古川市は、交通の便が良いと思います。私は、K社（明石市）に就職しますが、西明石駅まで新快速で1駅で通えるので、加古川市に住み続けようと思います。③住み慣れているし、両親もいるので、将来的にも加古川市に

住み続けようと思います。加古川市は静かで、住んでいて疲れないところが魅力だと思います。しかし、もう少し都会の方に出たり、海外にも行ってみたいと思います。仕事の関係で海外に行く機会があれば、ぜひ挑戦したいです。

将来の夢は、①しっかりと仕事をして、地域のためにも働き、お金も稼ぎたいと思います。②任された仕事はしっかりとこなし、周りの人から信頼される人材になりたいです。③まだ、確固とした夢はありませんが、仕事をして、色んなものを見て学び、何か大きな夢を持ちたいなと思っています。以上で、発表を終わります。ありがとうございました。

3 神戸学院大学人文学部人文学科「神吉の里山保全活動を盛り上げよう!~矢嶋ゼミのフィールドワークから~」 (神戸学院大学人文学部人文学科矢嶋ゼミ 矢崎 瞳 氏)

神戸学院大学人文学部人文学科矢嶋ゼミの発表を始めます。私たちは、今年9月に、加古川市東神吉町神吉において、里山保全と活用について研究する夏合宿調査を行いました。まず、コミュニティ班から神吉町内会と町内会の象徴的存在である里山・神吉山の保全活動を行なう「ふれあい里山会」についてお



話します。神吉町内会は、加入世帯数約 1,080 世帯と、規模の大きい町内会です。神吉町内会は、様々な組織があり、そのなかに、ふれあい里山会があります。この会は、神吉町内会の象徴である神吉山の整備を通して、住民が気軽に利用できるふれあいの場を創出することにより、神吉町内住民の生活文化の向上、福祉と健康の増進を図ることを目的としています。活動内容は、里山管理作業のほか、小学生を対象とした食事や炭焼き等のイベントの開催、町内会が行う神吉山ウォーキング等の道案内等です。調査により、神吉町内会の空き家や高齢者の独居問題を抱えており、また、ふれあい里山会に関しては、若い方の里山への感心が低いことや、幅広い世代の交流が少ないことが分かりました。この課題に対して、神吉地区の象徴である神吉山を活用することが解決につながるのではないかと考えました。

次に、生物班より報告します。かつて、神吉山は住民が薪や炭を集めるために利用してきた生活の場でしたが、その後放置されるようになりました。また、神吉地区の生態系も変わり、ホタルやドジョウ等の生き物も最近ではあまり見られ

なくなりました。一方で、私たちは神吉山で、クワガタや養蜂のミツバチ等、きっと子どもたちに興味を持ってもらえそうな生き物を目にしました。そこで、神吉山で生息する昆虫を活用したPRが可能ではないかと考えました。例えば、群馬県のNPO法人「森の学校」では、子どもたちが森の生き物を学ぶことで、里山の活性化につなげる町おこしが行なわれています。そこで、矢嶋ゼミの谷川夏鈴がマスコットキャラとして考えたミツバチの「カンキチ」を活用し、神吉山のPRをすることで、生き物がたくさんいる神吉山により興味を持ってもらい、少しでも多くの子どもの足を運んでもらえるように提案しようと思います。

(神戸学院大学人文学部人文学科矢嶋ゼミ 松井 輝 氏)



次に、スポーツ班より報告します。ふれあい里山会では、年に1回、神吉町内会主催の神吉山ウォーキングが行われています。このイベントには、約200名が参加し、募集は回覧板で行なわれます。町外の方でも、当日の飛び入り参加が認められています。東播工業高等学校の吹奏楽演奏やビンゴ大会等のイベントも催されています。

このイベントに、さらに子どもたちを呼び込むための提案をしようと思います。参考にしたのは、福岡市の西新商店街で行なわれている「サザエさん」をテーマにしたウォーキングイベントで、ラリー形式で謎解きをするといったものです。これを参考にし、神吉山にある生き物や植物、歴史に関するクイズを出題し、正解者にはスタンプを押すというスタンプラリー形式のイベントを提案するつもりです。景品を用意すると、子どもたちもきっと喜ぶと思います。一方、4月には、神吉山で加古川ウェルネスパークが初めて主催したウォーキングイベントが行われ、ウェルネスパークが作成したパンフレットも配られました。参加者は20名程でしたが、町内会以外の方々に対して、広告塔的役割を担うイベントと言えらるとともに、神吉山のブランド向上にもつながります。

次に、歴史班より報告します。神吉地区や神吉山には、歴史に関する遺産が数多くあります。それらを活用して、神吉山ウォーキングに取り入れることができるのではないかと考えました。歴史ウォークの事例として、広島県福山市で、「親と子の歴史ウォーク」が「備陽史探訪の会」によって行われています。この歴史ウォークでは、クイズ大会やペットボトルで作成されたホラ貝づくりといったイベントが行われています。また、歴史のマスコットキャラを活用し

ている事例として、彦根城の「ひこにゃん」が有名です。そこで、ミツバチの「カンキチ」から神吉山にある西国播磨三十三カ所観音像をモデルに「カンキチ地蔵」をつくってみました。これを歴史のマスコットキャラにして、神吉山ウォーキングに活用するとともに、クイズ大会等を取り入れることで、子どもたちに興味を持ってもらい、親と一緒に来てもらうことで、親がふれあい里山会に加わるきっかけにしたいと考えました。

(神戸学院大学人文学部人文学科矢嶋ゼミ 大峪 真里 氏)

以上を踏まえて、広報班の研究結果を報告します。神吉山には、生物、歴史、ウォークイベント、運営体制の整った町内会と、多くの可能性が秘められていると言えるでしょう。一方で、ふれあい里山会以外の住民は、神吉山にあまり関わっていないことが課題として挙げられます。里山の保全活動を活性化するためには、地区住民が神



吉山に関心を持ち、ふれあい里山会の活動に意義を感じるようにするための広報が必要と言えるでしょう。そこで、地図づくりが有効である考え、研究例を調べました。1つ目は、有賀(2016)による「東京都23区JRまちあるきマップ」についての研究です。この研究は、駅等で目にする地図を取り入れたフリーペーパーの特徴について調査したもので、地図が観光客だけではなく、地域住民への情報発信の役割を兼ねていることを明らかにしています。2つ目は、穂坂(2013)による調布市の里山で作成された「自然環境地図づくり」です。この事例は、身近な自然への理解と保全を目的とした活動が行われていくことを狙って、「カニ山」と呼ばれる里山を調査し、地図を作成したものです。この地図は、付近の小学校にも配布され、地域住民が地域の自然を認識するきっかけにもなりました。最後は村中ほか(2013)による「安全安心マップ作成」についてです。この事例は、地域の危険箇所を地図にして、自分たちの手で改善していったというものです。以上のことから、地図を作成することで、地域の情報を自ら認識するとともに、地図で広報することで、その情報を地区住民に広めていくことができます。そこで、地区住民が神吉山に関心を持ち、里山会の活動に意義を感じるために、地図を生かした広報を提案します。作成者について、まず、ふれあい里山会の課題として、幅広い世代の交流が少ないことが挙げられます。地区内の様々な年齢層が協力して、地図を作成することで、世代間の交流が活発になっていくのではないのでしょうか。地図に書く内容につい

て、「カンキチ」のキャラクターを活用し、神吉山の生き物や歴史遺産、神吉山ウォーキングに必要な情報を載せて、町内会や神吉山ウォーキングで配布していきます。地区住民自ら地図を作成し、地区住民が地図に触れ、神吉山に何があるのか認識することができれば、神吉山に感心を持つことにつながり、里山会の活動にも意義を感じていくことが期待できます。その結果、神吉山の保全活動の活性化につながっていくと考えます。最後に、神吉山という地域の象徴を守るためには、町内会が地図を生かして、神吉山のことを地区住民に伝えていくことが重要で、それが里山の保全やまちづくりの第一歩になると言えるでしょう。これで神戸学院大学人文学部人文学科矢嶋ゼミの発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

4 兵庫大学健康科学部看護学科・生涯福祉学部社会福祉学科「地域を支える～認知症とその家族の生活支援のために私達ができること～」

(兵庫大学健康科学部看護学科 曾根 志穂美 氏、大野 沙耶加 氏、高田 怜佳 氏、谷口 ころろ 氏)



こんにちは、今から「地域を支える～認知症者とその家族の生活支援のために私達ができること～」について、お話をします。発表者は、健康科学部看護学科3年生の曾根志穂美、大野沙耶香、高田怜佳、谷口ころろです。よろしくお祈いします。また、この活動は生涯福祉学部社会福祉学科2年生と共同で取り組みましたが、実習の関

係で、本日は、残念ながら出席できませんでした。

はじめに、認知症の種類について説明します。現在、日本人の4人に1人が認知症、または、その予備軍と言われています。日本人に見られる認知症は、①アルツハイマー型認知症、②脳血管型認知症、③レビー小体病、④前頭側頭型認知症の大きく分けて、4種類があります。アルツハイマー型認知症は、老化により、脳に特殊なタンパク質が徐々に貯まっていくことで、指令を伝える神経が壊され、脳が小さくなることによって発症します。脳血管型認知症は、高血圧や糖尿病等の生活習慣病によって、脳梗塞や脳出血等の脳にある血管が障害されることで発症します。レビー小体病は、手や指の震え、無表情に見える仮面用顔貌、筋拘縮等のパーキンソン病のような症状が出るのが特徴です。前頭側頭型認知症は、初期には犯罪行動や今までできていた清潔行動ができなくなる等の人格障害や反社会的な行動が見られるのが特徴です。進行すると、ほかの認知症のように記憶障害等の症状が出ます。認知症の主な症状は、記憶

障害、判断力の低下といった中核症状と不安、幻覚が現れる、意欲がなくなるといった行動心理症状（BPSD）があります。

次に、私たちは日本の抱える認知症に関わる問題について考えました。認知介護、徘徊をめぐる問題、認知症高齢者の一人暮らし、肉体的・精神負担が大きいことで、介護者への負担が大きいこと、「2025年問題」が挙げられます。このなかでも、2025年問題について考えてみます。2025年問題とは、2025年になると団塊世代が75歳以上



になり、65歳以上の認知症高齢者が約5人に1人に達すると推計されているものです。2050年には女性の平均寿命が90.29歳と予想され、平均寿命の伸びが見られる一方で、日常生活において、介護等を必要としないでいられる期間である健康寿命と平均寿命の差が、男性で約9年、女性で約12年あります。平均寿命と健康寿命との差は、介護が必要な時間を指すため、高齢化に伴い、介護を必要とする人がますます増加することは明らかです。平均寿命と健康寿命の差が10年もあるにも関わらず、このように介護できる世帯は減少しています。結果的に、夫婦揃って定年後、セカンドライフを送る世帯が増えることを示しています。それでは、介護は誰がするのでしょうか。これが、いわゆる老老介護・認認介護へつながっていくのです。このような事故（配付資料の新聞記事）もあり、その責任について、世間でも話題となりました。

老老介護の現状について見ていきます。実際に、現在も老老介護は増加してきており、今後さらに増加することが予想されています。そこで、興味深いデータがあります。80歳頃の認知症出現率を約20パーセントとすると、夫婦ともに80歳の場合、二人とも認知症である確率は8%、11組中1組が認認介護をしているということになります。ただし、認認介護が認知症出現率をもとに算出されているということに注目すると、認知症の症状の発症を遅らすこと、防ぐことができれば、認認介護をする介護者の負担を少しでも軽減することができるのではないでしょうか。それでは、認知症の症状の発症を遅らせることや防ぐことはできるのでしょうか。さきほど、認知症の症状について、お話ししましたが、中核症状のきっかけである脳の細胞が死ぬということは、加齢変化に伴うことですので、ここを止めることは難しいです。しかし、行動心理症状は環境・心理状態に影響して出現します。言い換えれば、環境が整い、心理状態

が安定すれば、行動心理症状は発症しないのではないのでしょうか。これは、認知介護をする介護者の負担を軽減させるだけではなく、認知症の人を介護する全ての人の精神的・肉体的負担を軽減できると考えます。



そこで、環境心理症状を安定させるために、私たちができることは、認知症サポーターキャラバンです。認知症になっても、安心して、暮らせる地域を市民の手によってつくっていくことを目的とした認知症サポーターキャラバンは、厚生労働省を中心に全国で展開されています。認知症について、正しく理解し、認知症の人や家族を暖

かい目で見守り、支援する認知症サポーターを養成しています。これまでの認知症サポーターの人数は、全国で全人口の6.3%、805万人です。養成講座を受講後、サポーターの証として、オレンジリングが授与されます。オレンジリングは、認知症の人や家族を支援しますという意味を示す目印となります。認知症サポーターキャラバンでは、オレンジリングが、中心となる地域をめざしています。認知症サポーターは、何か特別にやってもらうものではなく、認知症を正しく理解し、見守る支援者です。その上で、自分のできる範囲で活動していきます。例えば、友人や家族にその知識を伝える。認知症になった人や家族の気持ちを理解するよう努める。隣人、あるいは、商店、交通機関等、地域で働く人として、できる範囲で手助けする等、活動内容は人それぞれです。兵庫大学でも、社会福祉学科と看護学科を対象に認知症サポーターの養成講座が開かれました。教員6名、学生138名が認知症サポーターになりました。これからは、認知症に感心を持ち、できる範囲で手助けをし、正しい知識を身につけ、学びを深めていきます。看護学科3回生が考えた、大学としてできることは、認知症についての学習を促す、健康教室を開く、交流の場を提供する等がありました。お茶会や座談会を開くことも挙げられました。そのほかには、イベントを開催する、正しい情報を提供する、認知症カフェをつくるという意見もありました。養成講座受講後、国際交流でタイのマハサラカム大学看護学科の学生・先生に向けて、リサーチフォーラムにて、英語で認知症サポーターについて発表を行いました。これから、世界でも問題になってくる認知症について、意見交換を行うことができました。ご清聴ありがとうございました。